

## 移民の歌2 佐佐木頼綱

前回、西岡氏の作品と業績について記したが、本稿では彼女の背景にある米国日系人の短歌について記したい。

米国日系移民の歴史を（漂流などを除いて）辿ると、明治元年に米国商人ユージン・バンリードを介しハワイと Guam へ渡つた元年者<sup>だねんしや</sup>と呼ばれる農場労働者や、明治二年にプロイセン人の武器商人ヘンリー・シュネルと共にカリフォルニアへ渡り農業定住地「若松コロニー」を試みた二十名程の会津人に遡る事ができる。彼らは奴隷同然の扱いを受けたり米国に置き去りになったりと散々な目にあっているが明治三年にはワシントンに日本公使館、サンフランシスコに日本領事館が開設。当時の米国国勢調査では米国本土に五十五名の日本人がいると記されている。明治政府が海外渡航を正式に許可した明治十七年以降は多くの日本人が渡来し農場や鉱山での労働や鉄道敷設などに従事。日系人が多く集まった地域では県人会や同好会が作られ、日本語の同人誌や新聞が刊行されていった。明治三十六年にロサンゼルスで創刊された日系新聞「羅府新報」もそんな媒体の一つである。

太平洋戦争勃発後、米国では十箇所の日系人強制収容所が作られ約十二万人の日系人が収容された。砂漠や荒野に作られた簡易的な施設で、英語の使用と米国への忠誠が求められ、忠誠を誓うか否かで収容された日系人達は政治的に分断された。同化政策を思

わせる過酷な環境だが、米国の思惑とは裏腹にこの強制収容所で米国日系人文学活動の花が開く。

・年餘経て母ゆ届きたる便りの唯一言を繰返し読む 吉松博志  
ツールレイク強制収容所で野沢穰二が編集した文芸誌「鉄柵」から引いた。日本語が制限された日系人は自らのアイデンティティーとして日本の文化や詩歌を求め、何冊かの文芸同人誌を生む。収録された詩歌を読みながら私は阪神大震災や東日本大震災後の新聞歌壇に多くの歌が寄せられた事や、郷隼人や坂口弘の獄中の日常詠との共通項を感じた。整理のつかぬ感情や制限された思いを文言化し吐露したいという思いや、苦しい状況を作品化して生活に物語を与える必要性がそこにはあるのだと思う。

戦中に強制休刊されていた「羅府新報」は昭和二十一年に復刊。収容所を経験した野沢穰二が入社し文学ページ「羅府文化」を設ける。誌面には振り出しに戻った生活の大変さを詠んだ詩や歌が並んでいる。異国で日本語の文学活動を継続する困難さは想像に難くないが収容所で芽吹いた精神と人材は「南加文藝」（昭和四十年〜六十一年）、「南加文苑」（昭和六十四年〜平成一年）と引き継がれ平成二年に文芸誌「移植林」が創刊。当初は文芸総合誌であったが短歌部門の同人が徐々に増え、誌面のバランスを取る為に短歌部門で独立。「羅府新報」を含めた日系誌に掲載される形で平成十一年まで伊勢正直、山口千代が編集している。「移植林」創刊の辞や後記を読むと伊勢、山口は外地における日本文学の伝承に加え、「移民文学」という一段低い枠組みを乗り越える事を目指していたようだ。彼らの精神を平成十二年からは西岡が「新移植林」として引き継いでいた。現在は岡本啓三郎氏らが継続の為に尽力しているところだという。